

童話 二つ

水谷年惠

蛤に呑まれたピン助

海の水が、さあつと引いた砂の上に、大きな大きな大蛤が一つ居ました。漁師達が、大蛤を見附けて、

「やあい、皆お出で、大きな大きな大蛤が居るよ。」と叫びました。濟邊の人々は、

「どれ〜、何處だ〜。」

と言つて、子供や大人が、大勢出て來ました。

「ひやあ、でつかいね。」

「家よりも大きいなあ。」

「山ぐらゐだよ。」

皆は大蛤のまはりを取圍んで、わい〜大騒ぎをしました。

すると、大蛤が、ばあつと口を開けました。さあ大變、子供も大人も大喜びで、手を打つたり、飛上つたりして、蛤の大きなおうちの中を覗きました。

ピン助といふ小さな男の子が、面白がつて、蛤のおうちの中へ飛込みました。人々はびっくりして、

「ピン助、だめだよつ。」

と言ひましたが、まだ言つてしまはないうちに、大蛤がぱくつと口を閉めてしまひました。さあ大變、

「ビン助が大蛤に吞まれた。大變だ、大變だ。」
と言つて騒ぎました。

ビン助のお父さんやお母さんは氣狂のやうになつて、大蛤に抱きついて

「ビン助を返せ——、ビン助を返せ——。」
と泣叫びました。

其の中に、海の水が沖の方から、だんくと押寄せて來ました。

「そら潮がさして來た。」

「皆早く岸へあがれよう。」

と言つて、大人も子供も皆岸の方へ走りました。

ビン助のお父さんとお母さんは、そんな事にはかまはず、

「ビン助やあつ。」

「ビン助やあい。」

と叫んでゐます。他の人々が、

「潮が來た、さあ岸までお出で。」

と言つて、ビン助のお父さんお母さんを無理矢理引張つて岸へ上りました。

海の水はずん／＼濱邊へ寄せて來て、大蛤をつかり隠してしまひました。ビン助のお父さんとお母さんは大急ぎで舟に乗つて、大蛤の居る邊へ漕いで行きました。そしてお父さんは海へ飛込んで大蛤を捜し、お母さんは船の上から、

「ビン助やあい、ビン助返せ——。」

と叫びました。

大勢の大人や子供は、濱邊から、

「ビン助やあい。」

「ビン助——。」

と大聲揃へて呼びました。

しばらくすると、ビン助のお父さんは、ビン助

をかゝへて水の上へ、ぶかりと浮びました。

「ビン助が助かつた。ビン助が。」

と船の上のお母さんは嬉泣き。お父さんの手から

ビン助を受取つて、舟の上へ引揚げました。

お父さんも後から揚つて、

「ふゝつ、ふゝつ。」

と息を吹きました。ビン助は息が切れて居りま

す。お母さんとお父さんは一生懸命でビン助を撫
でて、

「ビン助——、ビン助——」

と呼び續けました。

濱邊の方から人々が心配して船を出して來まし

た。五艘も六艘も八艘も出て來ました。ビン助が

「ふゝつ。」

と息を吹きますと、お父さんもお母さんも

「ビン助や、氣が附いたかい。有難い、有難い。」

と言つて喜びました。これを見た人々も、

「ビン助萬歳、ビン助萬歳。」

と言つて喜びました。

ビン助はすぐ元氣になつて、

「僕、蛤にいゝ物貰つたよ。」

と言つて、手に握つてゐた小さなガラスの瓶を見

せました。お父さんもお母さんも、ビン助の手に

ガラス瓶のある事には氣が付きませんでした。

ビン助は其の小さなガラス瓶を差上げて、中を

すかして見ました。ガラス瓶の中には何かどろ

くくしたものが這入つてゐました。ビン助のお父

さんが、

「どれお見せ。」

と言つて、ガラス瓶を手にとつて振つて見まし

た。不思議、小さなガラスの瓶の中のどろくが

もくくくくと動いて、瓶の中では、紫色のもつ

くり山が、もくくと十も、二十も、三十も現は

れました。しかも其のもつくり山が、もくく

くくと動いて居ます。お父さんもお母さんもピン助もびつくりしてしまひました。

「どれ、お母さんに見せて下さい。」

ピン助のお母さんが手に取つて、も一度振つて見ました。あら、不思議、どろ／＼がもく／＼／＼と動いて、今度は黄色の大入道が、どろ／＼／＼と動いて行きます。お父さんもお母さんもピン助も氣味が悪くなりました。それでピン助がガラスの栓を抜いて、なかのどろ／＼を海の中へどろ／＼つと、こぼしてしまひました。どろ／＼は海の水の中へ、こぼれました。

こぼれたかと思ふと、こぼれた水の上から、白い煙が濛々と立上つて、海の上の空に弘がりました。ピン助もお父さんもお母さんも、舟に乗つて出て來た大勢の人々も驚いて空を仰いで見てゐました。すると、其處へぼ／＼つと御殿が現はれました。お屋根も柱もびか／＼光つて居ます。お庭に

は花が咲き、樹が茂つて居ます。木の葉が風に吹かれて、ひら／＼と動いて居ます。お池には噴水があがり、白鳥が、すゝつ、すゝつと泳いで居ます。御殿の中から美しい／＼お姫様が出ていらつしやいました。お附きの人が後から大きな絹傘をさしかけて居ります。お姫様はお池の方へ歩いていらつしやいました。ピン助はじめ人々は、舟の中でも、濱邊でも、みんなあきれてぼかんと口を開けて眺めて居りました。

美しいお姫様が、ピン助の方を向いて、にっこりお笑ひになつたと思つたら、御殿も何も彼も皆すゝつと消えて無くなつてしまひました。

蛸のお茶碗

濱邊で五六人の男の子が蛸をいぢめて居りました。其處を通りかゝつたお爺さんが、其の蛸を可哀相に思つて、

「おい、みんな、此のお金をやるから、其の蝟を逃してやつて呉れないかい。」

と言ひました。男の子の一人が、

「お爺さん、ほんとにお金を呉れるのかい。」

と聞きました。お爺さんは、

「ほんとだとも、そらやるよ。皆で一つつ獨樂を買ひな。」

と言つて、お金を砂の上へ置きました。男の子達は喜んで、

「ぢや、逃してやるよ。一、二の三、あばよつ。」

と海の中へ蝟をほうり込みました。

ぢやぶんと音を残して、蝟は水の中へかくれてしまひました。お爺さんは、

「よく逃してやつて呉れた。有難う、有難う。」

と言つて行つてしまひました。

二三日たつて、お爺さんがまた濱邊を通りました。すると岩の陰から、

「お爺さん、お爺さん」

と呼ぶものがあります。誰が呼ぶのかと、お爺さんは其の邊を見廻しましたが、誰も見あたりませぬ。

「はて、不思議なことだ。」

とひとり言を云つてゐると、又、

「お爺さん、お爺さん。」

と呼びます。

「誰だね、わしを呼んだのは、此處へ出て來なさい。」

とお爺さんが云ふと、岩の陰から、ちよろ／＼と一匹の蝟が出て來ました。

「何だ、蝟か、何か用があるのかい。」

とお爺さんが聞くと、蝟は、べこ／＼お辭儀をして「お爺さん、此の間はどうも有難う御座いました。」

た。私はお爺さんに助けて頂いた者です。今日は其のお禮が申し上げたいので出て來ました。」

「どうかい、それは感心な事だ。もういよいよ、まあ早くお歸へり、又腕白小僧達に捕へられたら大變だよ。」

「お爺さん、ちよつとお待ち下さい。私はあなたに差上げたいものが御座います。」

「わしに何か呉れるのかね。それは有難い、何でも貰ふよ。」

「お爺さん、今此處に持つて居るのでは御座いません。それはまだ海の底にあるのです。」

「海の底にあるのか、それでは貰ふことはよさう。取りに行くのが大變だからね。」

「いゝえ、大變なことはありません。私が取つて來て差上げるのですから、お爺さんも手傳つて下さいませんか。」

「よし、よし、手傳はう。どうすればよいのかね。」

「お爺さん、長い綱を一本用意して來て下さい。それから船に乗つて、沖の方へ漕いで行つて下

ろす。」

お爺さんは早速長い綱を一本持つて來ました。

そして蛸と一緒に船に乗つて、沖の方へ漕出して行きました。濱邊から遠くく離れた海の上で、蛸が、

「お爺さんもう漕ぐのを止めて下さい。私の足を一本だけ此の綱でしばつて、私を海の中へ入れて下さい。」

と言ひました。お爺さんは蛸の言つた通りに、船を漕ぐのをやめて、蛸の足を一本だけ長い綱でしばつて海の中へ入れました。暫くすると、海の底で蛸が綱を、つんくと引きました。お爺さんは大急ぎで、綱を手繰つて、

「どつこいしよ。」

と、蛸を船の上へ引揚げました。蛸は七本の足でしつかりと大きな茶碗を一つ掴んでゐました。

蛸は其の茶碗をお爺さんの前へ据えて、

「お爺さん、御苦勞様で御座いました。さあこれがお爺さんに差上げたいと思つた物で御座います。」

と言つて、丁寧に辭儀をしました。お爺さんは「へえ、此の茶碗を下さるのかい。それは有難う。此の茶碗には何かわけがあるのかね。」と、茶碗を手にとつて、不思議さうに眺めて居ります。

「はい、わけがあります。大層面白いわけがあるのです。此の茶碗は昔々、遠い遠い國の王様が魔法使のお婆さんから貰つた茶碗です。此の茶碗で食べると、どんなまづい物でも、うまい、頬ぺたが落ちる位うまい御馳走に變つてしまふので御座います。」

「へへえ、それはいい茶碗だね、それがどうして海の底になぞあつたんだい。」

「どういふ不思議な茶碗ですから誰でも欲しいで

せう。でも王様のですから誰もすわつて見る事も出来ませんでした。それを悪者が一人盗み出してしまひました。そして船に乗つてどん／＼逃げて來ました。日本の海の此處迄來た時、大嵐が起つて、船がひつくり返つてしまひました。此の茶碗は其の時海の底へ沈んだのです。それから何萬年か此の茶碗は海の底にあつたので御座います。お爺さん、これから此の茶碗で御飯をおあがりになつて下さう。」

と言ひました。

お爺さんはそれから、毎日毎日、其の茶碗で御飯を食べて、

「あうま、あうま。」と言ひましたと云。